

2017ROUTE 日本海-太平洋シンポジウム(報告書)

中部日本横断自動車道（中部横断自動車道・上信越自動車道）沿線の歴史や風土の異なる静岡・山梨・長野・新潟の4県で開催されてきた「ROUTE 日本海-太平洋シンポジウム」は、本年度で31年目を迎えました。

今年度も、参加者に「中部横断自動車道の早期開通の必要性」と「中部日本横断自動車道の全線開通後に見込まれる沿線地域の産業や観光の活性化と地域のつながり、暮らしや環境への影響や期待される効果等」を理解していただく場としてシンポジウムを開催しました。

開催日：平成29年11月15日（水曜日）

会場：大泉高原八ヶ岳ロイヤルホテル

主催：2017ROUTE 日本海-太平洋シンポジウム北杜実行委員会

構成 北杜市・北杜市商工会

北杜市議会議員中部横断自動車道推進の会

北杜市企業交流会

北杜市農業企業コンソーシアム

参加者：国会議員、国土交通省、中日本高速道路株式会社、沿線県知事、沿線市町村長
地元県議会議員、関係民間団体(約350人)

主催者あいさつ：2017ROUTE 日本海-太平洋シンポジウム北杜実行委員会会長

北杜市長 渡辺英子

2017ROUTE 日本海-太平洋シンポジウムが、多くの関係者の方々にご参加をいただきまして、北杜市において開催できますことを、心から感謝申し上げます。

前回開催から8年の間に、中部日本横断自動車道の多くの区間が開通し、着実に整備が進んできておりますが、いまだ未整備区間（長坂～八千穂間）も残されております。

本日のシンポジウムは、「地域をつなぐ生命(いのち)の道」というテーマのもと、「中部日本横断自動車道の早期開通の必要性」についての理解を求めるとともに、「開通後に見込まれる新たな道と地域発展について」考える場となるよう構成しております。

沿線の各自治体や関係諸団体の更なる連携を図り、早期の全線開通に向けて取り組んで

まいりたいと考えております。

基調講演：「DMOによる観光地ブランドの構築に向けて

－自動車道の開通をどう生かせるか－

近畿大学経営学部商学科教授 ふるさと財団地域再生マネージャー

高橋一夫氏

・高速道路の延伸と観光振興の課題について

交通の利便性は観光目的地に必要な「要素」の一つであり、観光地域に欠かせない要素としては魅力・値ごろ感・清潔感・安全性・雰囲気・アクセスの利便性があります。

中部横断自動車道の全線開通により、移動の所要時間が大幅に短縮され、観光行動の範囲が拡大します。それに伴い、消費者にとっては選択肢が増えるが、沿線地域には競合する地域が増えることになるので、アクセスのみでなく、情報提供や楽しめる商品作り、情報伝達のためのプロモーション、地域活性化のメニューを考える必要が出てきます。

・ツーリズムと地域ブランディングについて

現在の日本では、インフラ整備が整っていて地域の違いが出にくいいため、地域性を目を向けないとブランド作りが出来ない状況にあります。また、地域の認知度と訪問意向度には相関関係がありますが、名前だけ知っていてもイメージが湧かないという例もあります。

地域ブランドとは、名前自体に価値があり、行ってみたいと思わせるものであり、ブランド作りのためには沿線地域の知名度を高め、イメージの湧くプロモーションをすることが必要です。観光客に形のない体験・思い出を作り上げて感動を持たせ、長期的な関係づくりをすることにより、地域が提供する価値を確立し、ブランド化することが出来ます。

・担い手としてのDMOについて

DMOとは、地方自治体と民間事業者による観光ビジネスの共同体で、観光地経営を担うための機能と高い専門性を有し、観光行政との役割分担による権限と責任を明確にしたプロフェッショナルな組織です。また、観光地経営とは観光地域において設定される目的を達成するために、持続的・計画的に意思決定をおこなって実行に移し、観光地域の様々な主体と調整をしながら観光事業を管理・遂行することです。

経済的価値創出としての観光は集客だけではなく、旅行客数の増加・消費拡大・域内調達率の向上によるものです。

DMOは観光行政との機能分担、組織に関与するメンバーによる主体的な意思決定、プロ（専門家）による運営などの示唆を日本版DMOにどう活かしていけるかが問われます。

パネルディスカッション：「未来を繋ぐ新たな道と地域発展について」

コーディネーター NPO法人 えがおつなげて代表理事 曾根原久司氏

パネリスト 公益財団法人するが企画観光局企画開発部企画開発部長 片桐 優氏

北杜市企業交流会会員 (有)藤森電機工業代表取締役 藤森孝之氏

北杜市農業企業コンソーシアム物流部会長 ㈱city farm 代表取締役

山寺法和氏

八ヶ岳地区野菜輸送協議会会長 川上陸送㈱代表取締役社長

小池和幸氏

新潟県上越市農業委員

岸田 健氏

片桐氏：地域性が違う地点が結ばれることは、観光交流にとっても素晴らしいと思います。

清水港には外国人観光客を乗せたクルーズ船が来ますが、こういった観光客の観光できる地域も広がります。生産性の向上という点から考えても、中部横断自動車道が出来ると甲府から清水までと東京までとを比較して100km、2時間くらい短縮されるため、沿線地域にとっての清水港の価値が上がります。これは、圏域全体の生産性の向上にもつながると思います。

藤森氏：自分が手がけている半導体製品の流通については、年々装置が大きくなり、輸送に負担が増えています。また、ほとんどの製品が海外に出荷されているため、中部横断道の開通に期待しています。

山寺氏：農業でも、生産物を速やかに各地に送り出さなければならないので輸送ルートの確立は大切です。労働時間短縮や働き方改革と言われる中で、輸送ルートを整備する意味は大きいと思います。また、北杜市からの輸送だと中央道を使って東京に出るイメージがありますが、トラックで北関東に行くときは小諸を回ったり、冬場に西に出る時は一度静岡に下がってから愛知に向かったりもしています。高速道路が出来ることによって輸送時間が短縮でき、新鮮なうちに運べることもあり、中部横断道の全線開通に期待しています。

小池氏：長野県内には大きな野菜産地が3地域ありますが、川上村・南牧村はその中で最大であるにもかかわらず道路整備状況が一番遅れています。働き方改革やバス事故の影響で運送業界でも運転手の労働時間・運行時間の短縮が大問題となっていますが、ほかの産地に比べてインターチェンジへの距離があり、坂道が多く運転技術が必要とされるなど人材の確保が困難になっています。高速道路はつながっ

てこそ初めて機能を発揮するものであり、整備が遅れている八千穂―長坂間を含めて全区間一体で一日も早い全線開通を期待します。

岸田氏：新潟県の状況としましては、後継者不足により農村が埋もれ気味なこともあり、情報発信等に取り組んでいます。静岡・新潟は遠い地域ですが、清水につながるにより行ってみたいと思うようになりますし、観光客についても、同じように行ける場所まで行きたいと考えるのではないかと思います。

曾根原氏：静岡と新潟の直線距離は約 200 kmと聞きましたが、実際の距離以上に心理的な距離が遠いという話も聞きます。中部横断自動車道の開通により、各地域を行き来し、心理的な距離が縮まることの意義は大きいと思います。